
兎屋珈琲店

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兎屋珈琲店

【Nコード】

N2694F

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

海に面した街、月見浜。月見浜商店街の一角にある兎屋珈琲店にまつわるそれぞれのドラマ。一話完結のオムニバス形式で贈る小説です。

月鏡

「次は月見浜、月見浜……」

抑揚の無い乗務員のアナウンスが、私の目的地である駅の名前を告げた。

海沿いを走る電車の車窓からはどこまでも広がる海と果てしなく広がる空が、美しい青のコントラストを描いていた。

ほんの数日前、私は恋人から別れを切り出された。それまで、幸せだと思っていた彼との生活が一瞬にして壊れた。彼のいなくなった部屋で、私は泣き続けた。止めどなく涙があふれ、言葉にならない嗚咽が途切れることは無かった。

すべてがどうでもよくなったのだろう。私は都会での生活も仕事も放り出して、気がついたら故郷に戻る電車に飛び乗っていた。

空の青、海の碧。本当ならとても美しい光景であるはずなのに、今の私にはまぶしすぎて、かえって残酷な光景に見えた。

「まもなく、月見浜。月見浜」

乗務員のアナウンスが聞こえた。私は座席から立ち上がると電車の扉に向かった。電車が駅に到着するとゆっくりとその扉が開いた。扉が開くと車内に潮気のある懐かしい風が入って来た。私はその風を浴びながらホームに降り立った。

「一〇年か……」

私はぼつりとつぶやいた。高校を出てから一〇年、私は一度もこの街に帰ったことがなかった。

どうして今になって。自分に問いかけたも、答えは出なかった。

駅を出ると、駅前の商店街のアーケードが一〇年前と変わらぬ姿で私をむかえてくれた。だが、よくよく見ると、少しだけ違っていた。塗料のはげた後がそこかしこに見えた。

アーケードをくぐり、商店街に入ると、一〇年前に友達と毎日のように通った商店街は様変わりしていた。私がいた頃には無かったコーヒーのチェーン店やファストフード店が増え、代わりによく見知った店がまるで櫛の歯が抜けるようになっていた。

初めて出来た恋人と出会ったレコード店も、学校の帰り道に遊んだゲームセンターも今はただ、空しくシャッターが閉まっていた。

商店街に入って五番めの筋を曲がってすぐが私の家だった。家のすぐ前まできたとき、懐かしい人から声をかけられた。

「あら、恵子ちゃんじゃない？　ずいぶん女らしくなって。最初誰かと思ったわ」

向かいのおばさんだった。小さい頃から家族ぐるみの付き合いのある人で、両親が泊まりがけで留守をする時は、よくご飯をごちそうになったものだった。

「ご無沙汰しております。お元気そうで何よりです」

一〇年ぶりの再会にしては、ずいぶん他人行儀な挨拶をしてしまっ

た。

「こちらこそ。元気でやってた？　うちはね……」

元々、おしゃべり好きな人だったので、一〇年の間に起きたことを私に全部話そうとしたのか、おばさんはひたすら喋り続けた。

白髪が増えたこと。三年前、私より三つ年上の娘さんが結婚したと。お孫さんを連れて、よく旦那さんのぐちをいいに遊びにくること。話題が泉のように湧き出では、私に教えてくれた。

私はあいつちを打ちながら、おばさんの話を聞いていた。一〇年の空白を埋めるように。

「え？　恵子？　いつ帰って来たの？」

外の話が私の家の中まで聞こえていたようで、母が家から飛び出して来た。私とおばさんは「じゃあ、この辺で」とお互い挨拶をして別れた。

私は応接間に通された。母が麦茶とお茶菓子を持ってくるまで、私は部屋の中をきよろきよろ見回した。大きくは一〇年前と変わっていないが、変わっていたものもあった。

「もう、帰ってくるなら連絡くらい入れなさい。こっちにだって、色々準備があるんだから」

部屋の観察を続けていると、母が冷たい麦茶を持ってやって来た。

「ごめんなさい。そういえば、一〇年間帰ってなかったのよね。一

〇年前に無かったものがいっぱい」

一〇年の歳月は「私の家」を「私の家」でなくさせていた。パソコンといい、新しいテレビといい、冷蔵庫といい、私が家を出て行っ
てから買ったものがたくさんあった。

「そりゃ、一〇年だもの。がたが来るものも出るわよ」

母は何を今更という表情をしながら言った。

「それにしても、どうして今になって帰って来たの？」

母はいきなり本題を切り出した。私は何も言わなかった。

「男にふられたでしょ？」

私は凶星をつかれた。母の方を見ると、母は笑って言った。

「あんたのことなんて、生まれた時から知ってるのよ。それに同じ
女だもの。わかるわよ。それぐらい。こっちには少しいるんですよ。
部屋はそのままにしてあるから、羽根のぼしていきなさい」

「え？ 本当に？」

私はちゃぶ台から身を乗り出した。母は面食らった様子だったが、
ため息を一つついて言った。

「本当よ。掃除大変なんだから。感謝しなさい」

私は二階にあがると、自分の部屋の扉を開けた。目の前には一〇年

前と変わらない私の部屋があった。遅くまでテスト勉強した机も、高校生のときよく読んだ雑誌も。学生時代の制服も。寝転びながら彼に電話したベッドも。よく聞いたCDもラジカセも。何もかもが一〇年前と同じだった。

私はようやく、落ち着ける場所にたどり着いた気がした。

「ありがとう。お母さん」

けれど、母から返って来た言葉は意外なものだった。

「今、あんたが帰って来たのは、ちょうど良かったかもしれないね。健児が今度結婚することになってね。私達と一緒に住むことになって。それで、あんたの部屋を譲って欲しいって今度お願いするつもりだったの」

弟の健児が結婚することも、私の部屋がなくなってしまいうことも今初めて知らされた。私の最後の居場所がなくなってしまう。私はい知れない不安に襲われた。

「恵子、どうしたの？」

「ちょっと……散歩してくる」

母の問いかけをにべもなく返すと、私は家の外に出て、商店街へ向かった。

私の家にも、商店街にも、私の居場所が、よりどころがない。私は無気力になりながら、ただ意味も無く商店街をさまよっていた。

空の色が青からオレンジ色に変わる頃、私は商店街の片隅にある小

さな店をみつけた。

つり下げられた小さくて黒いうさぎの看板の下には。おすすめのコーヒーが書かれた黒板があった。

「兎屋珈琲店？」

聞いたことの無い名前だった。一〇年前にはここにはそんな店は無かったと思う。私は小さなうさぎの看板に導かれるように珈琲店の扉を開けた。

「いらっしやいませ」

店に入ると、コーヒーの香ばしい香りとともに、マスターの低くて落ち着いた声が私を迎えてくれた。

「あの、時間は大丈夫ですか？」

外はもう夕方。普通なら、そろそろお店を閉める時間帯だった。実際、私の他にはお客はいなかった。

「大丈夫ですよ。どうぞ」

マスターは私をカウンターまで案内してくれた。年は三〇代後半だろうか、丸いレンズの眼鏡をかけていて、少しだけ長い前髪を真ん中で分けていた。きれいなシャツとベストにエプロン、まるで品の良いレストランのギャルソンのような格好をしていたが、ここに立っていないと、もしかしたら学校の先生でもおっってしまうかもしれない穏やかな雰囲気をもった人だった。

カウンターに腰掛けた私は、店内をきょろきょろ見回した。

兎屋珈琲店はカウンターにテーブル席が二つの小さな店だった。テーブルも椅子もカウンターもオーク色をした濃い茶系統のインテリアで統一され、店内を流れるジャズとあいまって、商店街の喧噪を忘れさせてくれる静かな店だった。ふと窓際のテーブル席の壁を見ると、「ここは禁煙です」とあまり上手でない字で書かれた張り紙が書いてあった。落ち着いた雰囲気とのミスマッチに、私はつい笑ってしまった。

「ご注文は？」

マスターの問いかけが私の意識を現実に戻した。

「あ、はい。では、ブレンドを……」

コーヒーと言っても、職場やカフェで、時間つぶしに飲む程度の私にはコーヒーについての知識は持ち合わせておらず、無難にブレンドを注文することにした。

マスターはかしこまりましたというと、コーヒーを入れる準備を始めた。

「……ここへは初めてですか？」

お湯をカップに注ぎながら、マスターは私に尋ねて来た。

「ええ、この街は一〇年ぶりに帰って来たので。で、この街をでたときには、こんな店があるなんて知りませんでした」

「私が店を出したのが一〇年前ですから、もしかしたら、入れ違い

になってしまったのかもしれないね」

コーヒーの粉をペーパーフィルターに入れながら、マスターは言った。粉を入れ終わると、マスターはドリッパーにお湯を注ぎ始めた。はじめは少しずつ、ゆっくり、次からは多めにお湯を注いでいった。グラスポットに少しずつコーヒーがたまっていくのを私はじっと見つめた。

「どうぞ……」

マスターが、私にカップを差し出した。アンティーク調の陶器のカップに注がれたコーヒーからは香ばしい香りと白い湯気が立ち上っていた。私はカップを手にとると、一口コーヒーをすすった。

「おいしい……」

熱くなく、かといってぬるくもないちょうどよい温度、角のとれた苦みと酸味、全てが調和していて私がこれまで飲んだどんなコーヒーよりもおいしかった。

「ありがとうございます」

マスターは少しはにかみながら微笑んだ。

私はもう一口、コーヒーをすすった。コーヒーの優しい苦みと暖かさが今まで悩んで来たものをゆっくりと洗い流してくれる気がした。私はなんの脈絡もないまま、マスターに言った。

「少し、話し相手になってもらえますか？」

マスターはゆっくりとうなずいた。

私はカップを手で転がしながら話した。彼との別れ、一〇年ぶりに帰ったこの街で感じた寂しさ、どこにも居場所のないやるせなさ、悲しさ。まるで堰を切ったように言葉が流れ出た。マスターにぶつけていた。マスターは私の話をさえぎろうとせず、ただ、うなずいてくれていた。

気がつく、私はうつむいていた。飲みかけのコーヒーには、今にも涙を流しそうな顔が映っていた。

「コーヒー、冷めてしまいましたね。いれ直しましょう。もう一杯は私のおごりです」

マスターはそう言って、コーヒーを入れ直してくれた。私は二杯目のコーヒーをまたゆっくりと飲んだ。一口一口飲むたび、悲しさが薄れていく気がした。

「最初から居場所がある人間なんていません。誰かと交わって探して、見つけていくんです。居場所がなくなったのなら、また見つけてみてもいいのではないのでしょうか」

マスターの一言が胸にしみた。

「外、暗くなりましたね。今日は月がきれいなので、鏡浜に行くといいでしょう。きっと月鏡が見られるはずですよ」

私の街には大小二つの砂浜がある。大きい方は月見浜で、毎年夏になると、海水浴客がよく訪れる場所である。もう一つの小さい方が鏡浜だった。砂浜と言っても一〇〇メートルくらいしかない小さな

海岸で、地元の人でも滅多に行かない砂浜で、私も行ったことがなかった。

マスターが言った「月鏡」という言葉にひかれ、私は鏡浜へ行くことにした。

「話を聞いてくれて、ありがとうございました」

店を出るとき、私はマスターにお礼を言った。

「こちらこそ、いい時間でした」

マスターはそう言うのと穏やかに笑ってくれた。

商店街を出て駅から歩いて一五分ほどで鏡浜に着いた。あたりは民家の明かりも少なく、足下がおぼつかなくなるほど暗かった。なんとかして岸壁の階段をおり、砂浜に降り立った私は息を飲んだ。目の前には信じられないほど荘厳な世界が広がっていた。夜の闇と月の光がモノクロームの世界を作り出していた。全てを飲み込みそうな夜の闇、その中を優しく月の光が照らしていた。

海を見ると、もう一つ月が浮かんでいる。月明かりが海面に反射して、月の像を映し出したのだ。空の月と海の月、私の前を二つの月が照らしていた。

「これが月鏡……」

闇の中を優しく照らす二つの月、それは私が見た中で最も美しい光景だった。

しばらく月鏡を眺めていると、少し離れたところから、ハーモニカの音が聞こえた。暗闇にもようやく目が慣れて来て音の方向へ近づ

いて行くと、中学生くらいの少年が岸壁の上でハーモニカを吹いていた。

「ねえ、何してるの？」

「誰？ おばさん」

私の問いに、少年はぶっきらぼうに言った。

「失礼ね。私はまだ二八よ」

私はムキになって言い返した。

「中学生から見たら、二〇歳過ぎればおばさんだって。こんな月鏡の夜はさ、一人でハーモニカ吹いてるんだ。あまり人も来ないしさ。月を独り占めできるだろ」

少年の言う通りだ。こんなきれいな夜を独り占めできるのはなんて素敵なことだろう。そう思いながら月を見ていると、少年がまたハーモニカを吹きだした。洋楽のスタンダードナンバー。よく聞いたことのある曲だった。私は少年のハーモニカに合わせて歌い始めた。

「へえ、うまいじゃん」

少年はいったん演奏をやめ、そういうとまたハーモニカの演奏を続けた。私は歌いながら少年の方に目を向け、微笑んだ。

私は自分の新しい居場所を見つけた気がした。

二つの月が私達を照らす中、私と少年のアンサンブルは続いていた。

月鏡（後書き）

オリジナル連載小説第一作目です。

今までは二次創作中心だったので、現代を舞台にした小説を書くのはほとんど初めてで、色々模索しながら書きました。

これからは兎屋珈琲店を中心に、さまざまな人を出していこうと思います。

お楽しみください。

ベトナムコーヒー

私が初めてコーヒーを飲んだのは、十年前だった。お洒落好きで、あたらしもの好きなおじいちゃんが、オープンしたての珈琲店に連れて行ってくれた。

オーダーのとき、おじいちゃんがジュースにきなさいって言うのも聞かずにおじいちゃんと同じがいいとコーヒーを頼んだ。

生まれて初めて飲んだコーヒーは当時五歳の私にはとても苦くて飲めたものではなくて、へそを曲げた私に、マスターは穏やかな笑顔をしながら、もう一杯コーヒーを出してくれた。

それが私とベトナムコーヒーの出会い。

コーヒーの苦みの中にコンデンスミルクの濃厚な甘みが広がってとてもおいしかった。

それ以来、私は兎屋とベトナムコーヒーの虜になったのだ。

私は今、学校から商店街へ続く坂道を自転車で駆け下りている。私の通う月見ヶ丘高校は月見浜の街を一望出来る高台の頂上にある。行き道の上りは大変だけれど、帰り道に海と街を見ながら、風を切って坂を一気に駆け下りるのは私の楽しみの一つだった。

坂を下り、商店街のアーケードに入ってすぐの路地を右に入る。そこに私のお気に入り、兎屋珈琲店があった。私のブレーキをかけ、勢い良く自転車を止めた。

「こんにちは！ マスター！」

いきおいよくドアを開け、私はマスターに挨拶した。

「いらっしゃい。悠ちゃん。……あれ？　今日は兎屋の日だったかい？」

マスターはカレンダーをちらっと見た。

兎屋の日、それは私がこの兎屋珈琲店に来る日のこと。まだ、高1だし、おこずかいの少ない私が兎屋に来るのは週に1度だけ、少しでも兎屋に長くいたいから、次の日学校が休みの毎週金曜日に行くのがお決まりだった。いつの間にか、誰から言い出したのかわからないけれど、毎週金曜日は「兎屋の日」と呼ばれるようになった。

「そうだよ。マスター。でも、一週間過ぎるのは本当に早いね」

私はカウンターの奥の席に座ると、マスターに言った。

「ご注文は？」

「ベトナムコーヒー」

「かしこまりました」

マスターはにっこり笑った。

私はお店の中を見回した。平日の午後3時半。ちょうどお茶の時間帯ということもあって、兎屋は満員だった。マスターはカウンターの向こうで忙しく働いていた。私はマスターの動きをじっと見つめた。お店が満員でも、マスターは全然慌てない。むしろ落ち着いて

いて、流れるようなよどみない動きで、コーヒーを一杯、一杯入れていた。

「すごい。かっこいい」

私がそう言うと、マスターは少し恥ずかしそうにぷっと吹き出した。

「おだてたって何も出ないよ」

ドリッパーにお湯を注ぎながらマスターは言った。午後4時、お客も帰り始め、一段落ついた頃、ベトナムコーヒーがやって来た。

「お待たせいたしました。ベトナムコーヒーです」

香りのいいコーヒー。甘みが強くてクリーミーなコンデンスミルク。この10年間、ずっと私のお気に入り。一口飲むと幸せな気分になって、私は声にならない声をあげた。

「ありがとうございます」

マスターは眼鏡をあげながら少しはにかみながら笑った。

「今日はどうしたんだい？ えらく上機嫌だね」

マスターはカップを拭きながら私に言った。

「ふふふ……私、今、恋してるの」

へえとマスターはカップを拭いたまま聞いていた。

「部活の先輩でね。とつてもかっこ良くて、頭もいいし、やさしくて……」

マスターはにっこり笑顔を浮かべながら話を聞いてくれている。

「よくメールもするし、話していると楽しくて……これって恋よね。今度の金曜日、告白するつもりなの」

「なるほど、それで今日は決意表明をかねて……」

洗い物を終えたマスターは腕組みしてうなずいた。

「成功したら、祝杯だね。……未成年だから、もちろんコーヒで」

「ええ!？」 と私はオーバーアクション気味に不機嫌な顔をした。その日は兎屋が閉まるまで笑い声が絶えることはなかった。

次の金曜日、私はずぶぬれになりながら歩いていた。どこを歩いているのか、何をしているのか、わからなかった。

私は意を決して先輩に告白した。けれど、その返事は私の一番聞きたくないものだった。

「ずっと付き合っている彼女がいる。俺はその子のことが好きだし、これからそうだ。今まで通り、気のいい友達でいよう」

それが、先輩の答えだった。他にも何か言ったのだろうが、頭が真っ白になって、何も耳に入らなかった。

「友達でいよう」

その言葉が私をいっそう傷つけた。友達……先輩は私を女の子としてみてくれていなかったのだと知ったから。

先輩と別れてどこをどう歩いたかわからない。いつのまにか私は兎屋の前にいた。私がゆっくりと扉を開けるといつものようにコーヒーの香ばしい香りが私を包んでくれた。

「いらっしやいませ……悠ちゃん。ちょっと待ってて」

マスターは私の姿を見ると奥に入ってバスタオルをかけてくれた。

「奥の部屋に着替えがあるから、着替えてくるといい。男物で悪いけど、このままでは風邪を引いてしまうよ」

奥の部屋で私はマスターから借りたシャツとズボンに着替えた。男物の服だったので私には少し大きく、袖をおって着ることにした。奥の部屋からお店に入ると、私の身体が冷えないようにマスターが温度を上げてくれたのだろう。少しお店の中が暖かくなっていた。

私はカウンター席に腰掛けた。

「ふられたのかい？」

コーヒーの粉をドリッパーに入れながらマスターは言った。私はマスターに目を向けた。

「わかるよね。やっぱり……」

そういうと、私はマスターから目を背けた。恥ずかしさと気まずさ

でマスターの方を見ることが出来なかった。マスターがお湯を注ぐ音だけが聞こえた。

「僕にも経験はあるからね」

苦笑いしているような声だった。

「どうぞ……」

目の前に出されたコーヒーを見て、私はかとなった。目の前に出されたのが普通のブレンドだったからだ。

「マスター。これ、普通のコーヒーじゃん！ 私が飲めないって知っているくせに！！」

マスターは落ち着いた声で私に言った。

「飲んでごらん……」

「でも」

「いいから」

私はマスターの言う通り、一口コーヒーを飲んだ。

「あれ？ 苦くない。それどころか、おいしい」

「おいしいと思うかい？」

私は不思議に思いながらもうなずいた。

「それはね。悠ちゃんが大人になったってことなんだよ」

マスターはポットに火をかけながら言った。

「人生、甘いことだけじゃないんだ。苦くて辛いこともある。けれど、時が経つてくると苦さも変わってくるんだよ。それを旨いと感じるようになる。苦いってことはね。味に深みを与えてくれるんだ。人生も一緒さ。甘いこと、苦いこと。全部抱えてよい人生を歩んでいくものなんだよ」

マスターが入れてくれたコーヒーがあたたかくて、マスターの一言が優しくて、涙があふれてきた。

マスターはもう一杯コーヒーを出してくれた。今度は私の好きなベトナムコーヒーだった。失恋の後に飲んだベトナムコーヒーは甘く、いつもより少し苦かった。

お店の中の白熱灯が店内を暖かく照らしていた。外を見ると、いつの間にか夜になっていた。マスターは時計を見た。兎屋を閉める時間だった。私が謝る前にマスターが優しく言ってくれた。

「時間は気にしないでいいから、ゆっくりしていきといいよ。けれど、お家の人には連絡を入れるんだよ」

マスターが店の外の後片付けのために出て行くと、私は家に電話をかけた。ほどなくして、店の外の黒板を抱えたマスターが戻ってきた。

「雨がやんで月が出ているよ。今日はいいい月だ」

お店の窓から眺めると、雨上がりの満月がぼんやりと薄白色の光を放っていた。その光はとても幻想的で、美しかった。今度はマスターがスツールを出して来てくれた。

「外で見ないかい？　こないいい月、なかなか見れないよ」

兎屋のある路地は今夜は人通りが全くなく、静まり返っていた。私はマスターが出してくれたスツールに腰掛けて月を見上げた。兎屋の小さい看板の真上にぼんやりと輝く白い月。あたりを見回すと、月の光に照らされて雨露が星のように光り輝いていた。

そんな路地裏の小宇宙に私は目を奪われた。

「きれい……」

路地裏の宇宙、天上の月、この静かな空間だけ、私はそれを独り占めすることが出来た。無数の光を浴びて失恋で出来た心の傷がゆっくり癒えて行くように感じた。

私はもう一度月を見上げた。天上でぼんやりと輝く満月は私をいつまでも優しく照らしていた。

ベトナムコーヒー（後書き）

ベトナムコーヒー・・・ちょっと書き直しました。
この方が良いかなと思って

ご意見感想、お待ちしております。

夕焼けの縮図

「まいったなあ……」

水曜の午後、俺はなじみにしている兎屋のカウンターで深いため息を吐きながら漏らした。

「また、魚茂さんの『まいったなあ』が始まった。今度はどうしたんですか？」

マスターが苦笑いをしていった。

「いや、明日せがれの三者面談なんだけどよ。先生からどんなお小言食らうのか恐くってよ」

俺はマスターが入れてくれたモカを前に腕組みした。マスターはカップを磨いて笑っている。

「魚茂さんが怒られる訳ではないんですから、大丈夫ですよ」

マスターはいつものように落ち着いた笑みを浮かべて言った。あの笑顔で話されると、大丈夫だと言う自信に満ちてくるから不思議だ。

「まあ、そうなんだけだよ。あいつあ、俺と女房に似て勉強なんざかけらもしやがらねえ。ギターとハーモニカにばかり打ち込みやがって」

「何かに打ち込むのは良いことです。私は目の前に一人、何事にも打ち込みやすい人を知っていますよ」

マスターはいたずらっぽい視線を俺に向けてかけていたメガネを直した。マスターにそう言われるとぐうの音も出なかった。俺は元々コーヒーなんて飲む柄じゃなかった。だが、10年前、うちの店の裏にできたこの店の挨拶に訪れ、一杯のブレンドを飲んだその日から、この黒い液体に夢中になってしまった。

いつの間にか兎屋の全種類のコーヒーを飲み尽くし、今では商店街きつてのコーヒー通になってしまった。

若い頃はロックに打ち込み、月見浜で仲間とともに悪の限りを尽くし、「お月見爆弾」の異名を取ったこの俺が、こんな風にコーヒー飲んで、父親面してせがれの進路の心配をしているなんぞ、死んだ親父にも想像がつかなかっただろう。

俺は更にマスターに愚痴を言い続けた。マスターは微笑みながら俺の話を聴いてくれている。十歳ほど年が離れているのに、いつもながら感心しちまう。

「このままじゃ。高校も行けねえかもしれねえ……その点……」

俺がこの先を言おうとしたとき、兎屋のドアが開いた。ジャズとアンティークに囲まれた大人びたこの店には相応しくなさそうなポニーテールをした小学生くらいの女の子が入って来た。

俺は女の子に挨拶をした。

「こんにちは。望香ちゃん」

「こんにちは。魚茂さん」

マスターの愛娘の望香ちゃんだ。12歳という年の割にしっかりした子で、今では家事を引き受けていると言う。

「あとでうちに寄んな。旬の魚、安くしておくからよ」

俺は望香ちゃんに言った。望香ちゃんはお礼を言おうと奥の部屋に入って行った。

「いつもすみません」

マスターが申し訳なさそうにお礼を言った。奥さんを亡くしてこの街に移り住んだマスターは兎屋珈琲店を開いて以来、ずっと望香ちゃんと支えあって生きて来た。いくら俺たちだって、時にはその手伝いをして、罰はあたらないだろう。

「何、いいってことよ。いつも美味しいコーヒーを飲ませてもらってるしな。それより……」

俺は頭をかいて別の話題に切り替えた。

「マスターも、そろそろ相手を見つけたらどうだい？ あれじゃ、望香ちゃんがふびんだ。母の愛も知らなくてよ」

俺は兎屋に通ってから、何度となくこの話題を切り出した。マスターは男の俺から見てもいい男だと思う。気持ちの悪い話だが、俺が女だったら、間違いなく求婚していただろう。だが、マスターの答えは変わらずにこうだった。

「すみません。私は彼女以外の人を愛することはできませんから」

そう言われると、いつも何も言えなくなるのが困ったものだが、マスターの言う通りだ。これもまた、恥ずかしいものだが、俺が女房を亡くしたら、同じことを言うだろう。家では喧嘩の絶えない俺たちだが、十六年も一緒にやって来たのは口にするのも恥ずかしい愛で結ばれてきたからなんじゃないかと思う。

全くもってがらじゃないが、性に合わないことをコーヒーとにらめっこしながら考えていると、マスターが話しかけて来た。

「コーヒー、冷めてしまいましたけど、おいしくなかったですか？」

「そんなことはねえよ。こっちこそ、すまねえな。慣れない考え事してせつかくのコーヒーを台無しにしちまってよ」

そういつて俺は残っていたモカをいっきに飲み干した。

「そういや、俺のせがれの三者面談の話だったな。まったくゆううつだな……あ、おかわりもらえるか？ 今度は、キリマンジャロにしてくれ」

俺は、また腕組みをすると、うんうん唸りだした。マスターは苦笑いしながら、ポットに火をかけた。

次の日の午後、俺は息子の健介と一緒に月見が丘中学にいた。高台の頂上にある月見ヶ丘高校に隣接する形で中学校があり、月見浜に生まれた子どもは皆、この中学校に通っていた。

普段着たことの無い背広を着て、俺は背筋を伸ばした。健介はそんな俺を嫌そうなまなざしで見ていた。

担任の先生に言われて、教室に入ると、一組の机が差し向かいでくっついて、面談の準備がなされていた。先生に促されるままに俺たちは椅子に座った。

先生もまた着席すると、準備されていた資料を流し読みして、俺に言った。

「今度の中間テストの成績を見ますと、非常に努力が必要ですね。体育と音楽は問題ないのですが……」

「はいっ！　せがれは、いや、息子は音楽にうちこんでばかりいやがりますので……」

俺はうわずった声を上げた。そんな様子をみて、先生は苦笑いした。

「お父さん。そんなにかしこまらずに……成績の話に戻りますが、五教科の成績が、その問題でして。中三のこの時期この成績では、地元での進学は難しいかもしれません」

自分のことを言われた訳でもないのに、俺は頭に衝撃を受けた気がした。先生はその後、健介のレベルに合った学校を薦めてくれたり、他の選択肢を薦めてくれた。

俺は先生に「すみません」を繰り返していた。時々、健介の方を見ると、心底軽蔑したようなまなざしで俺を見ていた。

三者面談が終わり、帰りの坂道で、俺は健介に言った。

「お前よお。音楽ばっかに打ち込んで、勉強しろよ。俺あ、先生の

前で恥ずかしかったぞ」

健介は慚然とした表情で言い返した。

「親父だって若い頃は音楽に打ち込んだって言ってたじゃねえか。なんで俺はだめなんだよ」

「そうは言ってねえよ。ただ、俺は勉強もしろって言ってんだ。そんなんじゃ、どこの高校だって行けねえじゃねえか」

俺は優しく諭すように言ったつもりだった。だが、健介は癪に障ったように一気に怒りだした。

「うるせえよ！ 学の無いのは親父だって同じだろ！ 俺は親父のようにならねえ！ 都合のいいときに父親ぶって押さえつけて、他人にすぐヘーコラする根性なしの生き方はしねえよ！」

俺はかっとなって、健介に平手打ちをくらわした。乾いた音がほんの少しの時間だけこだました。健介は驚いた表情を浮かべたがすぐに走り出し、街に消えて行った。俺は自分の手をしばらくみつめていた。

家に帰ると女房が俺を出迎えた。

「お帰りなさい。一体何があったの？ 健介、荷物を置くなり出て行ったわよ」

「ちょっとな。……悪い。俺も出かけてくるわ」

女房の顔に視線を合わせずに、俺は家を出て、また学校へ向かう坂

道に向かっていった。

坂道をのぼり、高台の中腹までやってくる。学校へ続く坂道はほぼ一本道だが、ただ一つだけ、交差点があった。交差点を左に曲がり3分ほど歩くと、月見台展望台があった。

高台の中腹の切り立った崖の上にあるこの展望台は坂道同様、月見浜の街を一望出来る。眼前百八十度に広がるパノラマは絶景というのに相応しい光景で、若い頃から俺の大好きな場所だった。

「もうすぐだな」

腕時計を見ると、そろそろ日が沈む時間になりかけていた。悲しいこと、辛いことがあると、俺はここに着て夕焼けを眺めるのが常だった。空の色が青から次第にオレンジに変わり始めていた。

「魚茂さん？」

ふと慣れた声に振り向いた。そこには望香ちゃんを連れた兎屋のマスターがいた。こざっぱりとした白シャツをルーズに着こなし、黒のデニムに合わせた格好は雑誌のモデルを連想させた。下手をすればカジュアルすぎる格好になるのだが、それでも落ち着いたように見えるのはマスターの性格故に思われた。

望香ちゃんはポニーテールをおろし、長いストレートヘアにしていた。白のブラウスと、ブラウンのロングスカートは年よりもずっと大人びた印象を与えている。俺はわざとらしく明るい声でマスター達に声を駆けた。

「よう！ マスター！ 今日休みか？」

「ええ、定休日なのでこうして、望香を連れて散歩に。この子はこの夕焼けが好きでして」

「そうか……いいもんだものな。ここの夕焼けは……」

俺は振り返って、空と海の景色を見た。オレンジ色の空と真っ赤な太陽がその日最後の輝きを放っていた。

「なあ、望香ちゃん、お父さんお借りしていいかい？」

俺は望香ちゃんに頼んだ。

「ええ、不肖の父ですがどうぞ」

望香ちゃんは可愛く笑うと俺たちから離れていった。

「いつもながら思うが、可愛い娘さんだな」

俺はマスターに言った。マスターは苦笑いして言った。

「最近はずっかりませてしまっ、困ります」

お互い子どもには苦勞してるなと笑うと、俺は本題を切り出した。

「なあ、マスター。人を殴ったことはあるかい？」

俺は夕焼けを見ながら言った。夕焼けのオレンジ色はだんだん濃くなって、あたりの空間そのものを全てオレンジに染めているかのようだった。マスターは俺の問いかけに静かに、重く返事をした。

「はい」

「俺もだ。若い頃はやんちゃなもんでよ。色んなヤツを殴ってきたもんだ。じゃ、マスター。大切な人を殴ったことはあるかい？」

マスターは一度間を置いて言った。マスターは俺から少しだけ目をそらし、悲しそうな声で言った。

「はい。一度だけ……」

「俺は今日初めて、せがれを殴っちまったよ。あれだけ人を殴ったのに、殴ったときには痛みなんか感じなかったのに、今日だけは、今日だけはひどく痛かったんだ。俺あ、俺あ……こんなに殴ることが辛いなんて初めて知ったよ」

目の前のマスターがにじんで見えた。夕焼けもくもって見えた。気がついたら、俺は涙を流していた。マスターと俺の間を、少しでも生暖かい風が吹いた。こんな風だが、今の俺の心には少しだけ痛く感じた。気がつくとも夕焼けの時間は終わりを告げ、見下ろした街には小さな明かりがいくつもついていった。

俺は寂しそうに言った。

「夕焼けの時間はすぐに終わっちゃうな。気がつくといつの間にか夜になってやがる……」

俺が落ち着くのを待って、マスターが話しかけた。

「魚茂さん、兎屋によっていきませんか。夕焼けの延長戦をしまし
よう」

俺は首をひねった。マスターが望香ちゃんを呼び、こっそり耳打ちをした。望香ちゃんは嬉しそうに頷いた。俺は「夕焼けの延長戦」という意味が分からなかった。今はもう暗くなっているし、兎屋で何をするのか……何度も考えながら、俺はマスター親子のあとをついていった。

定休日の兎屋に入ると、そこにはいつものコーヒーの香りは無く、電気を落とした店内は寂しく暗い印象を受けた。マスターは店の照明を付けていった。

「少しお待ちください。すぐに準備しますから」

俺はカウンターの中央の席に腰掛けた。望香ちゃんは俺の左隣に座って父親の仕事をじっと眺めていた。どんなコーヒーが出てくるのだろう。俺は少し楽しみになりながら、マスターの動きを眺めた。

「魚茂さん、コーヒーは全部飲みましたけど、うちのジュースは初めてじゃないですか？」

マスターは優しい微笑みをして、冷蔵庫からオレンジを取り出した。

「うちではジュースはフレッシュから作りますから」

そう言うと、マスターはオレンジを半分に分けて、絞り機で丹念に果汁を絞り出した。グラス2杯分の果汁をしぼり終えると、冷蔵庫から冷やしたグラスを取り出し、しぼった果汁を注いだ。きれいなオレンジ色の液体がグラスを満たしていく。バースプーンを取り出したマスターは、少しだけガムシロップをジュースに加えると、軽くかき混ぜた。

「マスター、バーテンダーみたいだな」

俺はちょっとだけ冗談を言った。

「それを言っでは、本職に失礼ですよ」

マスターは笑うと、もうひとつ、赤い液体で満たされたボトルを取り出した。ボトルのラベルにはグレナデンシロップと英語で書かれていた。ボトルをあけるとマスターは片手でバースプーンをグラスの縁につけ、一筋、赤いシロップを注いだ。静かで、それでいて自信に満ちたその動きは寒気すら覚える程洗練された動きだった。

グレナデンシロップを注ぎ、また、ひと回しだけかき混ぜると、マスターは俺たちにグラスを差し出した。

「どうぞ。これが当店のオレンジジュースです」

俺たちの目の前に出されたオレンジジュースは兎屋の照明で暖かく輝いていた。オレンジの鮮やかな橙色の中にグレナデンシロップの赤がまるで沈み行く夕日のようにグラスの底で淡く存在感を主張していた。まるで、あの展望台の夕日をそのままグラスの中に詰め込んだかのようにだった。

「なんか……飲むのがもったいなくなるな」

マスターは気恥ずかしそうに頬をかいた。望香ちゃんと乾杯すると俺はオレンジジュースを一口飲み込んだ。オレンジの優しい甘みが口の中に広がって、果実特有の渋みや、嫌な酸味は全く感じなかった。また一口含むと今まで持っていた暗い考えが癒されていくよう

な気がした。

「望香が昔言ったことがあるんです。あの夕焼けがもっと見たいって。日が暮れて、夜になってもずっと見ていたいって。普段わがまを言わない子だけに、あの時は困りました。二人で生きて来て、初めての喧嘩をしました。仲直りの印にこのジュースを考えたんです。最初に飲ませた時の顔と言ったら……」

「お父さん。恥ずかしいよ」

オレンジジュースをおとなしく飲んでいた望香ちゃんは顔を赤らめてうつむいた。

「子どもは不器用ですが、純粹です。理不尽なことを言うかもしれない。でも、我々の方から心を許さない限り、子どもたちも我々を許してくれない。私はそう思うんです」

マスターは洗い物をしながら言った。

「けど、けどよお。俺に何が出来るのか……わからねえんだ。謝らなきゃならねえ、そう思うけどよお……」

俺の不安げな一言に、マスターはさらに言った。

「謝る必要は無いんですよ。それに……魚茂さんも持っているじゃないですか」

俺ははっとなった。俺にも持っているじゃねえか。健介と共有出来るものを

「マスター、俺、行くわ！ ……あ！ とと、勘定、勘定！」

「今日は定休日。魚茂さんは、うちにお茶しに来ただけですよ」

マスターは器用にウインクした。

「ありがとな」

俺はマスターと望香ちゃんに手を振ると、家に戻った。

「健介は？」

「まだ、帰って来てませんよ。どうしたの？ 一体？」

出迎えた女房を半ば無視して俺はある支度を始めた。

「すまねえ！ また出かけてくる！ あ、健介と飯食って帰ってくるから、晩飯、今日はいいぞ」

そう言う俺は店を飛び出した。肩をすくめてあきれ顔で優しく笑う女房の姿が見えた。俺は店の軽ワゴンに乗り込むと一気に健介のいる場所に走らせた。

夕焼けの縮図（後書き）

第3話アップしました。

以前バーで飲んだオレンジブロッサムが忘れられず、こんな物語にしました。

珈琲店なのにジュース。今回は異色な話にしました。

カフェ・ミット・シュラゴバー（前書き）

今回は少しだけ番外編です。

月代雄哉先生とのコラボレーションです。

<http://ncode.syosetu.com/n33359f/6.html>

カフェ・ミット・シュラゴバー

旅館の主人という仕事を長年続けていると、様々なお客様に出会う。親子連れの方、お一人の方。美しい方、そうでない方。にぎやかな方、寂しい方。そんな多くのお客様に共通していることがある。それはこの旅館を愛してくださるということだ。

還暦はとうに過ぎた私は、今は家内共々、静かに残り少ない余生を楽しんでいる。庭園に出て、庭木の手入れをしていると、お客様が来られたとの知らせがきた。今では経営を息子夫婦にまかせ、旅館経営の第一線から退いているが、こうして毎日訪れるお客様をお迎えすることは今でも主人として大切な仕事であった。

「いらっしやいませ。」

玄関口で、大女将である家内とともに深々と頭を下げ、顔を上げてお客様のお顔を見た。私は驚きとともに、懐かしい感情がよみがえって来た。お客様は学生のように、まだ表情にあどけなさが残っていたが、10年ほど前によく会っていた女性に面影が瓜二つであったのだ。

「ん？私の顔に何かついていますか？」

年若いお客様に言われ、私ははっとなった。

「あ、いえ、何でもございません。お部屋のご用意が出来ておりますので、どうぞごゆっくりなさってください。」

私は仲居を促すとお客様をお部屋にお通しさせた。

「あなた・・・どうしたのですか？」

いつもと違う私の様子に、家内が心配そうに声をかけて来た。

「いや、何でも無い。少しの間あけるが、よろしく頼む。」

私は羽織を羽織り、帽子を被り、外出用の格好になると、杖を持ってゆっくり商店街へ歩いていった。

高台の中腹、月見台展望台とは対をなす場所にある私の旅館「望月館」から商店街まではさほどの距離は無い。坂道を下り、海と空と街の風景を楽しみながら、私は兎屋珈琲店にたどり着いた。

どっしりとした木の扉を開けると、香ばしいコーヒーの香りと、ジャズの音が私を包み込んだ。兎屋で飲む楽しみはいつもここから始まる。こもれ日が店内を暖かく照らし、兎屋が持つ優しく、暖かい雰囲気は幾倍にも増していた。

「いらっしゃいませ・・・これは望月館のご主人・・・ご無沙汰しております。」

マスターが少し緊張した面持ちで挨拶した。

「こちらこそ、なかなか顔を出さなくてすまんの。なにぶん年なのでな。許してくれ。」

私の方も頭を下げると、カウンター中央の席に腰掛けた。10年の歳月を経たカウンターテーブルが、初めて来た時よりもずっと優しく私を出迎えてくれたような気がした。

ふと、隣から、若々しく、かわいらしい声が聞こえた。

「ご隠居さん。お久しぶりです。」

今は亡き親友の孫娘、悠ちゃんだった。私の親友だった祖父に連れられて兎屋に来るようになった悠ちゃんは私と並んで、兎屋の最も古い常連の一人だ。

「これはお久しぶり。あれ？今日は兎屋の日だったかの？」

「違います。今日は、学校も部活も休みだったので、マスターに会いにやって来たんです。」

「ほほう・・・マスターも隅に置けんな。」

私は意地悪く、すっかり長く伸びた白いあごひげを撫でながらマスターに言った。マスターはこういう話には昔から弱く、顔を真っ赤にして、カップを磨いていた。

「ははは・・・久しぶりなのに、お厳しい・・・それで、ご主人。ご注文はお決まりでしょうか？」

「ああ、カフェ・ミット・シュラゴバーにしてくれんか。」

この注文にマスターは驚いているようだった。

「懐かしいですね。」

マスターは口に指をあて、考える仕草をした。

「無理かね？」

「いえ、大丈夫です。ただ、懐かしいと思ひまして。」

マスターは瓶から粉を取り出すと、準備を始めた。

「そうだな。昔、ここでそれを飲んでいた客のことをふと思い出しての、飲みたくなってしまったんだ。」

「カフェ・ミット・シュラゴバーっていうのは、なんですか？」

マスターとの会話に悠ちゃんが入って来た。聞き慣れない名前に、好奇心を抱いたのだろう。

「そうだな・・・ちょっと待った方がいいかもしれんぞ。もうすぐわかるから。」

しばらくして、香りの良いコーヒーと、粉砂糖がかかったホイップクリーム、チョコレートがトレイに乗ってカウンターに出された。

「どうぞ。カフェ・ミット・シュラゴバーです。」

「これがそうなんだ・・・」

好奇心豊かに、悠ちゃんがカフェ・ミット・シュラゴバーを見て来た。さて、そろそろ説明に入った方がいいかもしれない。私はマスターに頼んだ。

「これは、オーストリアのコーヒーの飲み方なんだよ。悠ちゃん。」

マスターが悠ちゃんに教えてくれた。

「昔、この飲み方が好きなお客さんがいての。それはきれいなお嬢さんだった。若いのに、娘さんがいて、よくお母さんと来ていたもんだった。」

「あ、私、その子覚えてる！私とあまり年が違わないのに敬語使ってて、びっくりしちゃった。」

悠ちゃんも何度か会っているようで、その親子を思い出したようだった。

私は、スプーンでクリームをすくい、コーヒーに浮かべた。濃厚なクリームはコーヒーにコクを与えてくれていた。一口飲むと、あの10年前のカウンターがよみがえってくるようだった。

「私は、彼女の真似をして、よくカフェ・ミット・シュラゴバーを飲んでいたよ。その時はこんな風な映画音楽がかかっていたかな。」

いつの間にか店の音楽が、ジャズから、古い映画音楽に変わっていた。マスターが私に気を利かせて、音楽を変えてくれたのだ。

「マスターも、若いのになかなか・・・食わせものだな。」

私は一口コーヒーをすすり、年寄りじみた笑みを浮かべた。しばらくコーヒーを味わい、口直しの水を飲みながら、店の中を眺めた。兎屋は10年前と変わらない。重厚な調度品の位置も、流れる音楽も、そして私達を包むコーヒーの香りも。私は目を閉じてセ

ピア色の思い出にひたった。

10年前のように、カウンターの左奥の席で、娘さんと今でもカフェ・ミット・シュラゴバーを飲んでいるあの女性がいるような気がした。

「さて・・・と。マスター。私はそろそろ帰るとしよう。楽しかったよ。」

コーヒーを飲み終わると、私は席を立ってマスターに挨拶をした。

「いえ、こちらこそ、懐かしい思い出をありがとうございました。」
マスターが、礼儀正しくお辞儀をした。

「あ、じゃあ、ご隠居さん。私、望月館までお送りします。」

悠ちゃんも席を立ってエスコート役を申し出てくれた。

「ありがとう、悠ちゃん。よろしく頼むよ。」

私と悠ちゃんは兎屋をあとにし、望月館に帰ることにした。兎屋を出てすぐ、魚茂の前で私達はあのお客様にすれ違った。どうやら、彼女も兎屋に行くようだった。

あの子もカフェ・ミット・シュラゴバーを頼むのだろうか、10年前の母親と同じように。アーケード街を出たとき、少しでも高くなった青空が私達の上で広がっていた。

カフェ・ミット・シュラゴバー（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか。

カフェ・ミット・シュラゴバーは初めて知ったのですが、なかなか面白い飲み方です。これが飲めるところで飲んでみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2694f/>

兎屋珈琲店

2011年9月9日16時44分発行